

論文審査の結果の要旨

氏名 クロードエヴ・デュビュック  
(Claude-Eve Dubuc)

クロードエヴ・デュビュック氏の論文、『A Reinterpretation of Japanese Women's Language: Unfolding Female Managers' Experiences and Choices

(日本社会における女性語の再解釈—女性管理職の経験と選択行動を解き明かす)』の目的は、日本の企業における女性管理職の、職場での言語活動を詳細に観察記録し、そのデータを解析することで、日本の「女性語」を再検討し、その理解を深めようとするものである。論者の研究動機には、これまで日本人女性に関する研究の中で、対象にされることの少なかった、社会的に確立した地位を占めている女性たちの姿を浮き彫りにすることで、日本人女性の、とりわけ海外におけるステレオタイプ的な像を正し、理解の偏りを改めようとする意図があった。

準備期間とデータの整理期間をのぞくと、実際の現場における調査は、2006年4月より、2007年3月までの12ヶ月間、4つの企業において行われた。いずれの企業でも調査者はオフィスの中で、特別の場合の他は、常時、自由な観察、音響映像機器の使用が許され、主要インフォーマントには、ピンマイクを付けてその会話を録音することが出来た。その結果、フィールドノートの他にも総計で314時間の音声データ、320時間の映像データという、相当量の重要な資料を得ることが出来た。

本論は、二部に分かれて、第1部は、「Portraying Women's Reality (女性の現状を描く)」と題されている。第1章と第2章では、本研究に関わる日本人女性の社会的地位に関する歴史的な背景と現状が描かれ、第3章では女性語研究の言語学的理論が紹介され、そして、第4章では、日本語における女性語研究のこれまでを検討すると共に、本研究が、文化人類学的な言語研究の学説史の中に位置づけられている。第1部は、全体として、第2部に対する歴史的、理論的背景となっており、とりわけ、日本語における「女性語」に関連する「言語イデオロギー」の諸側面を記述することで、第2部の分析の導入としている。

第2部の「Field Research and Data Analysis (フィールド研究とデータ分析)」は、本論文の主要部である。第5章では、調査対象の選択の経緯、調査、分析の方法が述べられる。その中で、のちに述べる女性管理職の言語活動における「葛藤」が浮き彫りになるよう、ヒエラルキーの強弱とフォーマリティの強弱、からなるマトリックスにより、4つの企業の4人の女性管理職が主たる調査の対象者として選ばれた。第6章では、その4人を中心とした会話の、詳細で精密なデータが提示され、分析が行われている。第7章では、それらの分析を総合し、解釈を加え、結論としている。

この第2部では、論者によって、ある一つの作業仮説が設定されている。それを前提として調査対象の選定が行われ、そのインフォーマントの言語行為のどこに焦点を当てるかが決められ、そのデータの分析が進められているのだ。その仮説とは、女性管理職は、ピ

ビジネスという文脈において、日々、決定、命令しなければならない立場にいるため、「女性らしさ」を過度に表現しないようにしなければならないが、一方、日本社会・文化の中での「女性」としても行動しなければならない。この二つの要請からなる「葛藤」の中で、彼女たちは女性語の諸特徴、たとえば、対立を避けること、相手を気遣うこと、などを受容しつつ、ビジネスの現場に適しないと思われる言葉遣いを避ける様々な戦略、工夫を行っているであろう、というものである。

それに基づいた分析によって、論者は、各企業における調査対象者が、それぞれの企業の持つ職場環境の性格、仕事の内容と目的、ビジネス上の会話を行う相手、といった複雑な要素が、一瞬にして交錯する発話の瞬間に、様々な言語戦略をとっていることを、多くのデータの分析から抽出した。それらの戦略が適用されている実態は、論者によって、実例で論証され、compartmentalization、balancing、interactivity、levellingと名付けられ、前述の作業仮説の正当性は十分に示された。

上記の内容を持つ本論文は、以下の三点において、文化人類学に対する貢献が顕著である。第一に、困難な調査をやり遂げ、膨大なデータを取得し、さらに、それらを分析にかなう形に整理したことで、堅固な言語資料を提示したことである。第二に、前述の仮説に基づき、現代の日本で管理職にある女性たちが、言語的「葛藤」の中から、多様な戦略をそれぞれ個別に取っていることを実例に基づき論証したことである。第三に、「女性語」と呼ばれるものが、固定した語彙や言い回し、また、固定的な発話態度にあるのではなく、すべての言語的可能性の中から、その文脈に応じた「使用」方法の中にあることを明らかにしたことである。

むろん、本論文にも残された問題点がある。「言語イデオロギー」というものの存在が前提されているが、そのことへの批判的検討が弱い。また、女性管理職の職場での言語活動における「葛藤」を、ジェンダーの要素から見ているが、職場における「権力関係」がもたらす側面への考察が十分になされていない。

しかしながら、こうした点は、本論文の本来の価値をそこなうものではなく、本論文は文化人類学の研究に対して重要な貢献をなしていると判断された。したがって、本審査委員会は、全員一致で、本論文提出者は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。